



先週の金曜日に4クラス授業がありました。1学期最後の授業となるクラスが2クラス。『数学だより』は前回のNo.10が1学期最後のものになっていたはずでした。このNo.11が1学期のうちに作られるようになるとは私自身考えてはいませんでした。

金曜日。皆さんが書いてくれた1学期の感想を読んで、心と体が温かくなりました。一人一人が気持ちをこめて書いてくれているのを読んで、本当に心が癒されました。

そして、どうしても、お返事を書きたくなったのです。でも、実際には一度崩れた体調は3日間ではよくなりません。ここでは何人かとだけしかできませんが、気持ちとしては皆さん全員と対話させていただく…そんな気持ちでこれを書きます。

1学期の間、卓哉先生と授業をして、本当に楽しいことばかりで、1時間目の時が多かって、朝しんどいと思っとったときでも、先生の授業をして今日も頑張ろ!! ってゆう気持ちになれました。先生は、たまにしんどそうな顔しとるとき休み時間とか見たけど、授業に来てくれる時は、しんどそうな顔ひとつもしないで、笑っている先生の授業が好きでした。先生も大変なのに頑張るさん、自分も頑張らなていつも思えました。数学の授業もいつも丁寧に教えてくださって本間に嬉しいです。最後の先生の書いた数学だよりを今、少し読んで、泣きそうになりました。先生はめっちゃ頑張るさん、自分も今からも頑張っていきます。先生の授業のクラスになれてほんとうに嬉しかったです。次の授業も先生のクラスがイイです。

自分もくるしい時には、先生のことを思い出して、何事もあきらめず、頑張っていきたいです。

先生に会えて、本当によかったし、嬉しいです。この紙には、伝えたいことを書ききれません。だから、このぐらいにしときます。先生～卒業する時は一緒にあってくださいよ。

これを読んでいて私は何度も涙を流しましたよ。そして、不思議でした。その奥にある気持ちを、深い感謝とともに、あなた、そして3ヶ月間一緒に授業を歩んできた皆さんに伝えたいと思ったのです。

私の病気は、日本全国で1年間に3万人(交通事故の3倍!)が亡くなっているものです。その原因として、病気そのものの苦しさというものもあります。しかし、『回復期』や『リハビリ期』には、むしろ社会の中の不理解や偏見による差別の苦しさ、一気に襲ってくるのです。つまり、心身の苦しさに加えて、差別と闘うしんどさを背負わなければならないのです。私も、これまで何度つぶされそうになったことか分かりません。

そして、その苦しさは、本当に人に理解してもらうことは難しいのです。

先週は、私にその大波が一気に押し寄せてきた週でもありました。妻とともに、共倒れになってしまうかもしれないギリギリのところがありました。

そんな中で、またまた、ありえないような出会いをいただいたのです。その一つは、苦しい私の傍らにいてともに私の苦しみを支えてくださっていた先生との新たな出会いです。そして、もう一つが、皆さんが書いてくれた感想でした。

とくに、あなたは私の「最後の」『数学だより』を少し読んで「泣きそうになりました」と言ってくれたね。「自分もくるしい時には、先生のことを思い出して、何事もあきらめず、頑張っていきたい」と言ってくれたね。

人の苦しみを我がことのように感じられる人が実際にいる。それがすでに奇跡的です。そのような人がいるということが不思議な気さえたのです。

ありがとう。心の底から、この気持ちを伝えたかったんです。